

## 〈研究計画に基づく研究費 特集〉

—平成14年度～平成16年度—

— 保健体育審議会答申を踏まえたボート競技国際競争向上への  
体育系大学としての寄与 —

### 1. 随想風に記す本研究計画の着眼点

朴 澤 泰 治<sup>1)</sup>

#### Introduction

HOZAWA Taiji

学都ボストンの旧市街中央にある地下鉄の乗換駅パーク・ストリートから、レッドラインの地下鉄に乗って約15分、ハーバード駅で降り地上に出ると、そこには、ハーバード大学のキャンパス中心部の賑わいがあった。

そこから、チャールズ川に向かってケネディ行政スクールの傍らなどを通過しながら数分歩くと、やがて河畔にたどり着く。

ボストン旧市街側に属する対岸には、フットボール・スタジアムを核とする広大なアスレチック・フィールドが拡がっている。そして、キャンパスをつなぐ大きな橋脚をはさんでチャールズ川の両岸に、ヨーロッパ風の落ち着いた建物が2つ、対角線を為して建っていた。

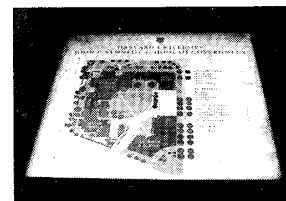
それが、ハーバード大学の艇庫であった。

アスレチック・フィールド側が男子用艇庫、反対側が女子用艇庫である。それぞれの艇庫とも、川に面して木造の大きな船着場が土手の斜面に沿って構築されていた。近くの紅葉が眩い木々には、可憐なリスがたわむれている。コンクリート護岸もない自然の姿そのままのチャールズ川では、ハーバード大学の学生達が操るシングル・スカル艇が川面をゆったりと滑っていた。

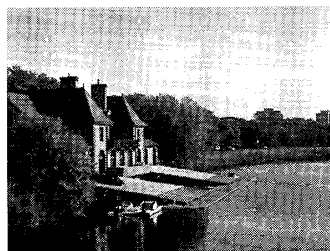
これが、いわゆるアイビー系ボート競技者の



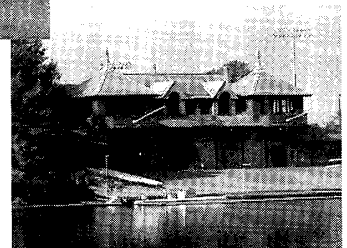
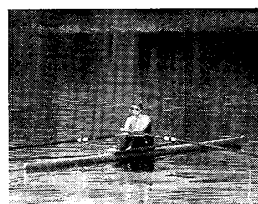
地下鉄ハーバード駅



キャンパス地図



女子艇庫



男子艇庫

1) 朴沢学園理事長

メッカであるチャールズ川の風景である。

訪問したのは、紅葉が盛りの2004年10月であった。そして、同時にそれは、ハーバード大学滞在経験を持つ本学・田口教授思い入れの地の風景でもある。

仙台大学漕艇部は、新世紀とともにその歴史を刻み始めた。

2001年春、田口教授の出身母胎である東北大学医学部第二外科に所属されておられた日本ボート協会理事の黒川助教授（当時）の来訪を受けたのが始まりである。黒川先生いわく、「会津若松出身で仙台に血縁者を持つ日本トップクラスのボート競技指導者がいる。東北大学ボート部OBとして学生競技の良き伝統を何とか継承したい。東北大学と並ぶ東北の学生ボート競技振興の場として、是非、仙台大学の協力を得たい」と。そして紹介されたのが、現仙台大学ボート部監督の阿部肇氏である。

仙台大学は、スポーツ科学を探究する大学である。黒川先生からも、そこを見込んでのご依頼である。

体育系大学だからこそ可能な競技力向上方策とは、いったい何であろうか。かねてより、仙台大学の各種スポーツ競技の指導の現実には欠落している事柄があると感じていた。

その一つは、折角、体育系大学として、スポーツ心理、運動生理、スポーツ計量、スポーツ栄養、バイオメカニクス、スポーツ経営管理その他、スポーツに関わる様々な領域の教育研究を行っているにも拘わらず、個々の競技種目の指導面において、それらの領域を統合して活用するような感覚が全く存在していないことであった。

他の一つは、指導体制に、目標管理的な発想、すなわち、Plan Do See（計画・実施・評価）というサイクルに着目した目標設定、およびこれに基づく計画的な競技力向上方策というものが殆ど取り込まれていないことであった。

目標管理的発想は、組織として事業を実施する場合には不可欠なものである。国家であろうが、地方行政であろうが、民間企業であろうが、教育機関であろうが、目的を有する組織体である以上は、一定の期間内の目標達成には Plan Do See という着想が必ず必要になってくる。

同時に、その着想に立てば、保有資源の有限性に気づくと同時に、限られた既存資源を如何に有効活用し統合していくかという発想が、次に必ず生まれてくるものである。仙台大学に限らず大学一般について、大学も組織体であるという認識をもつ大学人が少ない日本の現状は、グローバル化という観点では、とりわけ人材育成面の競争で諸外国になかなか打ち勝てないという結果を招来しており、それは、このことも原因の一つとなっているといっても過言ではない。

黒川先生と阿部肇氏は、当面の目標として、2005年に日本で開催される世界選手権での活躍ということを目にした。グローバルな競争に向けての対応とは、上述の組織体としての対応ということの意味する。そこに、この研究計画の方策の原点がある。

具体的な内容は研究計画の記載に譲るが、研究計画のメンバーは上述の「その一」の欠落を埋めるべく人選しており、また、研究計画自体、2005年世界選手権大会での仙台大学関係者の入賞ということ具体的な設定目標として、上述の「他の一つ」に該たる目標管理的発想を取り入れたものとしている。さらに、今般の中教審答申「我が国の高等教育の将来像」を先取りし、指導者の処遇その他、大学教員の人事政策等についても答申に示された考え方などを踏まえ、大学経営という視点から成果主義的発想の導入その他様々な試みを行っている。

この研究計画に盛り込んだ視点は、体育学科をはじめとする仙台大学の教育体制の再構築を究極の目標として目指すものでもある。この意味で、研究計画の遂行自体、仙台大学という組織体を活性化させるための目標管理的手法の実践ともなっている。

以上

（平成17年1月25日受付,平成17年2月1日受理）